

07

農家の生活に寄り添う 大学生たちの地域おこし

一般社団法人 ReRoots



MIYAGI
SENDAI

一般社団法人 ReRoots は、宮城県仙台市東部沿岸地域の農業支援のためのボランティア組織で、仙台市の大学生を中心に構成されている。若者ならではの視点と行動力で展開される農村持続の取組やコミュニティ活動支援について、代表の広瀬剛史氏に発足当時の思いや今後の展望を伺った。

代表者 広瀬 剛史氏(代表理事)

所在地 宮城県仙台市若林区荒浜字今泉 59-3

TEL 022-762-8211

WEB <https://reroots.nomaki.jp/>





① ReRootsファームでは、たくさんの種類の作物が試行錯誤しながら育てられている ② 剪定作業を慣れた手つきで進める学生たち

ヒト **学生たちの熱意に心を動かされた**

農 村地帯である仙台市若林区東部沿岸地域の農業の復興と継続に取り組む一般社団法人ReRoots（以下、ReRoots）は、仙台市内の大学に通う大学生を中心としたボランティア組織だ。その活動は、農作業の手伝いから、ReRootsファームで育てた農作物の販売、地域の住民が交流するためのイベント企画など、多岐にわたる。

ReRootsの起源は、東日本大震災の直後、仙台市青葉区の川内コミュニティ・センターに避難した大学生たちが中心となって立ち上げた避難所運営ボランティアだ。被災直後の混乱する避難所の中で、主に支援物資の運搬や炊き出しなどの活動を懸命に行っていた。そんな学生たちの様子を間近で見ていたのが、当時職場が被災し、川内コミュニティ・センターに避難していた広瀬剛史氏だった。避難所の状況が落ち着くにつれて、学生たちは津波被災地へのボランティアにも出かけるようになっていった。「被災場所の状況によって必要な支援は異なります。行政主導のボランティアセンターは、状況に合わせて柔軟に支援を変えるのは難しく、民間ボランティアはその場の一時的な支援が中心でした。そういった行政や民間のボランティアでは目の届きにくいサポートを、自分たちのような自由に動ける存在がやるべきなのではないか。学生たちはそんな思いを抱えていました。

そんなとき、沿岸部へのボランティア

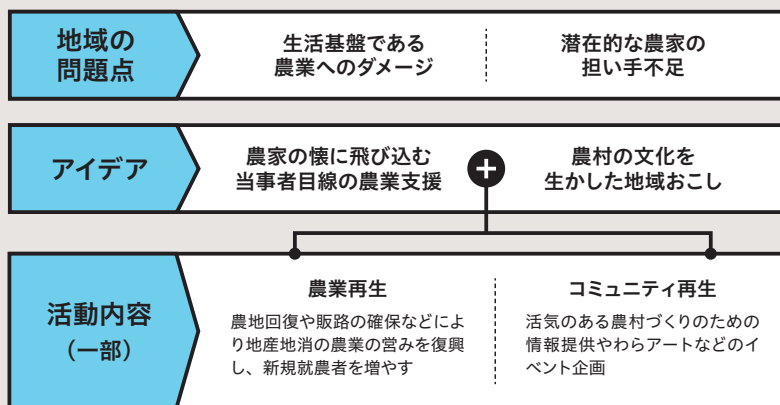
で、甚大な被害を受けた農地の実情に直面したことをきっかけに、学生たちはついに自分たちの力で農業支援を行うことを決意したんです。彼らの取組を間近で見ていた私には、『目の前の一時的・定型的な支援だけでなく、本当に現場の助けになる柔軟な支援を行いたい』と願う彼らの気持ちが痛いほど分かっていました。だから、何か彼らの力になりたいと思ったんです」。

学生たちだけでボランティア団体を運営することは、熱意があるからこそ、空回りしてしまうケースも多い。広瀬氏は、学生たちの気持ちを最大限生かすために、軸を持った組織として機能させるべく、全体を包括的に見て判断する立場として参加することを決めた。そうして、広瀬氏を代表として、ReRootsは本格的な活動を開始することとなったのである。

着眼点 **農家の懐に飛び込み 未来へつなげる農業計画**

広 瀬氏と学生たちは、内陸部の支援活動が落ち着いてきたころ、より被害状況が深刻であった沿岸部にボランティアとして訪れた。そこで、津波にさらわれ、がれきや流木に埋もれて変わりかた田畑を目の前にして大きなショックを受けた。生活物資の供給等の支援は一時的なもので、それだけで、農業を生業とするこの土地の住民たちが元の生活を取り戻すことは難しい。生活の基盤である農業を復旧することが若林地区の復興への最重要課題だと痛感し、ReRootsとして農業支援活動を開始した。まず取り掛かったのは、農地回復のためのがれきの撤去や用排水路の泥だしだった。

未来へつなげる農業の営みの再生





高齢地域に活気を運ぶ 農業の営み継承サイクル

「ただがれきを撤去すれば良い、というものではありませんでした。一度壊滅してしまった土地を、農業ができる土壌まで耕す必要があった。来る日も来る日も、土を掘り起こし、細かいがれきを撤去する毎日でした。学生たちにとっては、肉体的にも精神的にも相当厳しい労働だったでしょう。しかし、それを乗り越えたからこそ、ベテラン農家の方々にもReRootsの本気度が伝わったのだと思います」と、広瀬氏は振り返った。

農村の生活基盤が回復するレベルにまで農業を復興するためには、ただ農地をきれいにするだけでは足りない。その土地で農業を続けていくための環境と、地域で生産されて消費される、循環する農業の営みの再構築が必要だと考えた。その上で、農業を復興させるには農業の営みを深く知る地域の農家の協力が不可欠だ。農業支援にあたりReRootsが掲げたのは、「当事者目線」で活動すること。「言われたことを手伝う」ではなく、「一緒に考えて行動する」ことが大切なのだ。「農家の方からボランティアの依頼が掛かったら、『では、すぐに手伝いに行きます』とはなりません。まず、話を聞きに行くんです。『何を栽培しますか?』『今後、どういう農業にしたいですか?』など、かなり農家の方の懐に深く入り込む質問を投げ掛けさせていただきます。それは、我々が農家の方に最大限の敬意を払い、当事者として一緒にこの土地の農業の営みを復興させていきたいと考えているからです。一時的な農業の復旧ではなく、若林区の農業の未来を考えて活動をしています」と、広瀬氏は語る。

農地を回復させるだけでなく、今後の農業計画や事業の拡大、それに付随する課題解決まで、農家と一体となり地域の農業再生に取り組む。復興の先の「地域おこし」まで見据えた姿勢が農家の間で理解と共感を呼び、次第に様々な農家から復旧支援の依頼が掛かるようになっていった。

当初は復興が落ち着くまでの、3~4年間ほどの活動のつもりだったReRootsだが、周囲からの「続けてほしい」という声に押され、2019年ですべて8年目を迎える。大学生を中心とした組織であるReRootsには、毎年のように新入生が加入する。若者が自発的に農業地域を訪れるための入り口という機能を持つReRootsは、若林区の未来を描く上で、すでに不可欠な存在となっているのである。

農

地の回復作業がひと段落し、復興支援から地域おこしのフェーズに移行した現在のReRootsは、主に2つのチームに分かれて活動をしている。一つは「農業再生部門」、もう一つは「農村コミュニティ再生部門」だ。

農業再生部門が行うのは、市民農園での野菜の栽培や、移動販売による個人農家向けの販路の支援など、若林区内で農業を循環させ、地産地消の文化を構築するための活動が中心だ。その中で大きな課題となっているのが、農家の担い手不足である。

地域の農家の平均年齢は66歳を超えており、元々働き盛りの世代が都市部に移住してしまっていたことに加え、被災をきっかけに自分の代で農家を終業しようと考えている農家も多い。このままでは、高い水準を持つ農業の継承ができず、地域の農業の営みが失われてしまう可能性が高いのである。

そこでReRootsが検討しているのが、

農村塾だ。地域のベテラン農家の下で、農業に興味を持つ若者を研修させてもらう、というものである。

「農業技術だけ学んでも、若者が新しく農家として地域に定着するのはなかなか難しいんです。地域のイベントや、町内会などで農家の方と触れ合うことによって、独自の農村の文化や土地の歴史を学んで、初めて地域に溶け込むことができる。ただ、若者にいきなり現場に飛び込めと言ってもハードルが高い。そこをReRootsが窓口となることで、若者たちが、地域の中で農家としてスキルアップを図ることのできる就農サイクルをつくりたいと思っています」と、広瀬氏。

実際にReRootsの卒業生からも、現在までで4人の新規就農者が誕生している。今まさに地域の農家の下で研修中の小倉真紀氏が、就農を決めたきっかけを次のように語ってくれた。

「ReRootsに入るまで、農家になろうと考えたことはありませんでした。考えが変わったのは、農家の方と一緒に苦労して作った野菜を食べたとき。おいしさに感動すると同時に、毎日ひたむきに野菜づ



1



2



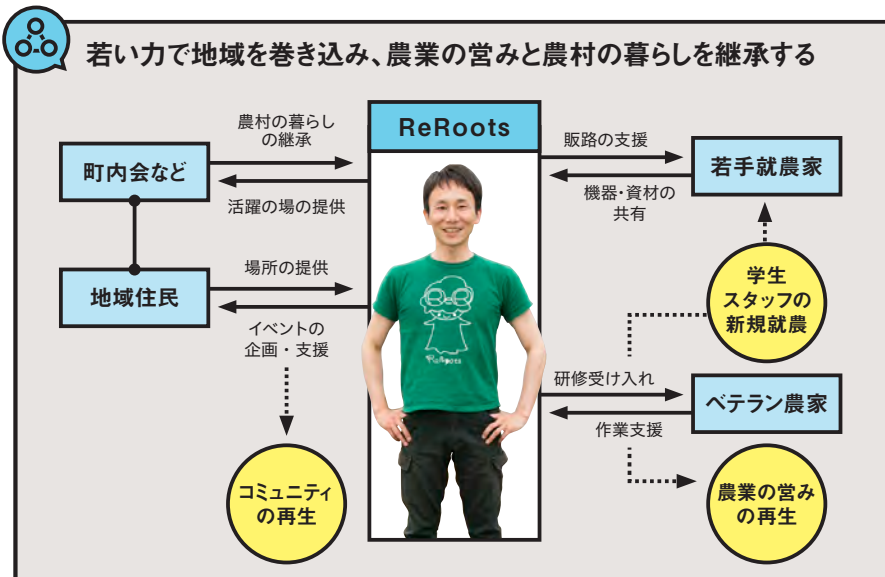
3

①「自分がモデルケースとなって、次世代にもつないでいきたい」と語る新規就農者の小倉氏 ②農村コミュニティ再生部門の打ち合わせの様子 ③移動販売に使用するのは、ReRootsのオリジナルカー「くるまっと」

くりに向き合う農家の方を、とてもかっこいいと思いました。担い手不足は以前から地域の課題だと言われていましたが、実際に農業に触れて初めて、このままではこんなおいしい食べ物を作る人がなくなってしまうということが怖くなったんです。ならば、自分がやらなければ、と思いました。後輩たちに農業を教えるためにも、まず自分が現場に入って学びたい。そう考えて、就農を決めました」。

彼女は2019年の4月から、いよいよReRoots農業法人部門としての活動をスタートさせた。加えて、彼女を中心に、ReRoots自身が率先して就農のノウハウを後輩に継承するための活動も本格化する予定だ。ReRootsの就農サイクル形成への試みは着実に進んでいる。

一方、農村コミュニティ再生部門は、地域で助け合い、相互のつながりを維持していくための情報提供や企画立案等の活動が中心。地元の各町内会と連携し、祭りの手伝いや町内会の会議に参加し、若い視点での意見発信を積極的に行っている。また、若林区を未来につなげていくための活動として、農業やコミュニティ形成における地域の課題を取りまと



め、2～3年に一度、冊子にして周囲の住民に配布している。

ReRootsでは地域おこしの一環として観光誘致の取組も行っており、最近力を入れているのが「わらアート」だ。農家から不要になったわらを譲り受け、そのわらを使用したアート作品を作り、イベント会場などに飾って観光の目玉にするのである。2019年も、9月15日から

「2019せんだいわらアート～つながる・遊べる・楽しむ若林～」を開催しており、毎日多くの方が訪れている。昨年では計約7万人の来場者がイベント会場を訪れ、大盛況だったという。地域の高齢者の中には、わらアートをはじめとする高い工芸技術を持った人も多く、そうした人々の生きがいにもなり、総じて地域の活性化につながっているという。

PLAYER'S INTERVIEW



代表理事 広瀬 剛史

茨城県石岡市出身。2012年10月、農業支援組織である一般社団法人ReRootsを設立。2020年には、ReRoots出身の新規就農者を中心に農業法人の設立を計画している。

目指すゴール

- 2 道徳をゼロに
- 4 質の高い教育をみんなに
- 11 けみ続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任つかう責任

新規就農者はその土地の未来の食を担う大切な資源だ。農業文化の継承と地域コミュニティの活性化の相互作用で、若者が地域に定着する環境を構築し、持続する農村を目指す。



ボトムアップで実現するゆるやかに持続する農村

ReRootsが目標にする若林区の10年後の姿は、「ひなびた持続する農村」です。無理に発展しようとしなくていい。田舎の風土を生かした活気ある農村を、地域で協力して運営していこう、そんな思いを込めています。そのために必要なのが、若林区の誇る農業の営みと農村の暮らしを次世代に継承していくこと、そして祭などの昔ながらの文化とわらアートのような新しい仕組みで地域のつながりを活性化させ、自活力のある農村をつくることです。

ReRootsは大学生が中心の組織であるため、毎年常に新しい人が入ってきます。つまり、農村地帯に新しい風を吹き込む役割を担っているということです。若いからこそ、吸収力や行動力は随一です。地域の様々なコミュニティを巻き込み、彼らの考える魅力的な地域づくりを次々と実現していくでしょう。高齢化が進む若林区の中で、学生たちが真剣に地域おこしに取り組む姿勢は、周囲にも刺激を与えているようで、地域全体の意識も前向きに変わってきていると思います。

農業を土台にした農村の暮らしの持続と地域の活性化のために、若い力を持つReRootsができることはまだまだたくさんあると考えています。今後も農業再生とコミュニティ再生の2つの軸で、ゆるやかに持続する農村を、地域一体となって目指します。